

21世紀にキリストを生きる

「声なき者の友」の輪 柳沢 美登里 「祈りの通信」

第19号(2017年11月)

<聖書の神が紡ぐ物語：「声なき者の友」たちと被造物ケア>

<求道時代からの友夫妻とバンクーバーへ旅立った事情>

親しみを込めて呼びあう S 姉との友情は、37 年前、大学 1 年のとき通い始めた教会の求道者会から始まった。当時「神様を信じるって、どういうことかしらね。」「イエス様って、こんなことしたのかな。」などなど、すでに信じている人には話すことがためらわれ、まったく関心がない人には「そんなこと考えてるの～」と思われるのを避けたい宙ぶらりんな状態を共有できる貴重な友だった。魂の渴きを覚えた時期、共感しあえる同年代の友に出会えたのは、世の中では「偶然」。でもイエス様を主と告白するとき「主の恵み」だ。80 年代後半、教会でカンボジア難民の方々の集まりが開かれるようになった。彼女とは、「声なき人々」を支える同じ思

いが与えられ、一緒に手伝いをした。このつながりは、お互いの居住地が遠くなってしまっても続いた。やがて仕事一筋だった彼女が結婚し、彼女の連れ合いが震災後の釜石に

80 年代後半、教会でカンボジア難民の方々の集まりが開かれ…「声なき人々」を支える同じ思いが与えられ、一緒に手伝いをした。

事一筋だった彼女が結婚し、彼女の連れ合いが震災後の釜石に

転勤したとき、彼女は地域の人々への支援で疲れ揺れていた小さな教会を支えようとした。「イエス様の体の一員として、ここで私にできることは何だろう」と主体的に取り組む姿に、大震災によって埋もれていた彼女の賜物が振り動かされたように思えた。2012 年夏、私は釜石の彼女たちを訪問し、（下：大槌町のひょうたん島の前で）夫



妻で支えていた教会の先生と食事を共にした。その 5 週間後のこと。原発事故後の支援で訪問していた福島県いわき市の教会

で、釜石の先生の顔を見つけた！椅子から落ちそうなほどびっくりした。このとき、イエス様が友夫妻を用

いられるご計画があり、私も何

かの形で参加するように導かれる微かな予感がした。

定年後は自然農法を通して、地域の人々が教会に集う一助になる働きをしたいと願っていた連れ合いが、今年初め、思いがけずに準備を始めていた場所から引き離される事態が起きた。この出来事にとても落胆した夫妻を励ますために、何ができるのか主に祈り始めた。

<福島原発事故から始まったバンクーバーのニューエデン・ミニストリー>

今年 3 月、原発事故から 6 周年を迎えた福島県を再び、訪問した。今回、バンクーバー在住の韓国人の親友スファンの働きかけで、2 年前に初めて福島を訪問したカナダ・バンクーバーのチャーチ・オブ・オールネイションズの志保子牧師夫妻と教会員の中華系マレーシア人で幼少時代にカナダに移住した（今の世界は、国境を何度も越えて移住する人がいっぱい！）ラニさんが一緒だった。バンクーバーで教会開拓を始めたばかりの志保子さんたちは福島原発事故後、重い心で祈っていた。そこから、ニューエデン・ミニストリーという教会による畠の働きをバンクーバーで立ち上げるこ

とにした。毎月 2 回、共に土を耕し、種を植え、畑の世話をし、共に食事をし、共に祈り讃美をする活動だ。志保子さんは 2 年前の訪問中、こう語った。「福島の放射能汚染地域に暮らしていた人々、被造物、生態系すべてにとって想像を絶する破壊がもたらされ、以前と同じように暮らせるようになるには、幾世代もかかることを想うと胸が締めつけられる。」そして、福島で田畠の表層土がはがされてい



たのを見て「あー、主よ、私たちはあなたの創造になんということをしてしまったのでしょうか。」と呻き声をあげたのだ。放射能汚染で声を出せない人々、被造物、生態系という「声なきすべての被造物」の痛みと喘ぎに触れ、イエス様の体である教会として、見過ごされていた大地の友となることを決意した。造られた大地に触れ、大地から食物を育ててくださる神様をもう一度、しっかり心に留めようと共に作業をするものだ。

2 年ぶりの話を聞く。昨年はシリア難民の方々も含めて 25 か国もの人が入れ替わり、集まつたという。スライドも見せてもらった。子どもたちが楽しそうに土や野菜に触れ、様々な国籍

の人々が畑作業に携わるスライドを見ていたら、定年後の人生のために準備していた畑地から切り離されて辛い思いをしている友の連れ合いを思い出した。

外国には全く関心がない、と聞いていたのに突拍子もない考えが浮かんだ。「S 姉夫婦とニューエデン・ミニストリーを訪問しよう」と。実現不能なアイディアに思える。でも、神様が道を開いてくださるかもしれない。祈り始めた。福島原発事故で深く傷ついた人々と大地のための呻きの祈りを聞きあげ、人々が土に触れて造られた主を見上げるニューエデン・ミニストリーを誕生に導いてくださった主は、友夫婦にも「失望の今まで終わらない」と、語っておられるように思えた。

＜もう一つの訪問先＞

「長年の親友夫妻とのバンクーバー訪問の可能性を祈り、検討している」とバンクーバーで暮らす親友スファンに連絡した。

彼女は福島原発事故直後の 2011 年 4 月、祈って東日本にいる私たちのところに来ると決めた。福島訪問に同行し、共に福島の人々に寄り添って祈り、海外の人々に真実の福島の人々の姿を伝えようとしたのだ。「あれほどガランとした成田の入国審査場を見たのは初めて。」外国人が東日本から一斉に退避していた時期、主に呼ばれて「声なき者の友」になると決断したスファンだ。最初の 2 年、彼女は 1 年に 3 回ほど来日して、福

島を共に訪問してくれた。その後も毎年、共に福島を訪問し続けている。

彼女は 2015 年、聖書の理念から世界で被造物ケアを推進する「アロシャ (A Rocha)」という団体の「国際チーム」の一員として貢献するように要請された。年 2 回ほど世界各地での会合で近況を報告し、祈りのときを持つのだ。「アロシャ」は、ポルトガルのある地域の環境回復に携わった英国人宣教師によって 1983 年に始まった。聖書が語る包括的な宣教による回復の対象には、地球環境が含まれることを明確にし、地球温暖化や環境破壊が地球規模で憂慮されるとき、回復に向けた実践を世界中の地域で推進している。40 年以上前、人の救いは魂だけでなく、人のあらゆる側面の統合的な回復だと聖書の包括理解を明言したローザンヌ運動に触発してきた私には、現代のローザンヌ運動の核の一つである神の被造物である地球上のすべての造られたものの回復という「被造物ケア」の中心的働きを担う「アロシャ」と福島の「声なき者の友」となった親友スファンをつないだ神様の導きの物語を見せていただいたように思えた。「声なき者」には、世界の数えきれない弱い立場の人々と共に、人間が守る責任を与えられていたすべての生物、そしていのちを支える生態系を回復する地球環境が含まれるという 21 世紀の視点に、目が開かれ始めたのだ。

神様から人に託された重要な働きの「被造物ケア」に関わるキリスト者が中南米、アフリカ、アジアと世界のいたるところで立ち上がっている。「アロシャ」の「国際チーム」の一員になったスファン

ンから、一つの提案が返ってきた。「農業での共同体に关心があるてニューエデンを訪問しにバンクーバーに来るなら、ぜひ、すぐ近くの地球を支える農法（自然・無農薬）と環境保護や教育を推進するアロシャ・カナダの環境センターに宿泊して雰囲気を味わって見学もしたら？」と。「広大なカナダで、車で10分で行ける距離にあるなんて、神様のお膳立てに違いない！」

こうして、神様によって様々な時期に出会った「声なき者の友」たちがつなげられて、祈りが積み上げられた。S姉の連れ合いの思いと休暇すべてが神様のみ手で整えられ、私たちは神様への期待に胸を膨らませ、9月半ばバンクーバーに出発した。
＜ニューエデン：多国籍のイスの体が大地に触れる＞

私もS姉も生まれてからずっと団地や郊外の住宅地で暮らし、田んぼや畠に日々明け暮れる農家さんの暮らしの感覚がまったくない。私は小学生時代、田んぼでザリガニやオタマジャクシ

「声なき者」には、世界の数えきれない弱い立場の人々と共に、人間が守る責任を与えられていたすべての生物、そしていのちを支える生態系を回復する地球環境が含まれるという21世紀の視点に目が開かれる。

とが日課だった。九州・天草の春夏秋冬の農家の生活が、体に染みついている。

9月中旬には霜が降りたバンクーバーの畠で、私は何をどうしたらよいか見当もつかず、ボートとした。一方、お連れ合いは「水を得た魚」状態。通訳の私は、野菜の状況の必要を目にし、あちらこちらに飛び回り始めた彼のペースについていけない。畠作業の責任者のケンさんが、農業セミプロの彼の質問に答えてくれた。

今年最後のニューエデンの畠では最初、数人の参加者だった

のが、気づけばそれほど広くない畠に、様々な国籍の人や家族連れが賑わっていた。自然農法を学び続いている彼のある質問へのケンさんの答えが印象的だった。「参加者には最初から正しいや

採りを経験し、田畠の色づきの変化に気づいたけれど、日々、作物の変化に触れる経験をしたことはなかった。それに対して、S姉の連れ合いは農家に生まれ、田んぼや畠を手伝うこ

り方を強制しません。ある程度の指向性を教えたら、彼らが実践して成果を自分で感じ取るんです。うまく育たなければ翌年、自分で考え、人にも聞いて良いやり方を自分で探すので。」人間の知恵と努力は必要だけれども、それ以外の環境要因（神様が統治しておられる！）にも大きく依存する土づくりと野菜づくりの畠作業を通して、野菜の成長と一緒に学んでいく。人が学ぶという本質である主体性や各自のペースを土に触れる実践で気づく場だった。それを多様な国籍の人々と分かち合うのだ。一糸乱れぬ整然さの工場で追及する効率的生産での「経済的豊かさ」とは違う、人と作物にそれぞれのペースがあり、できる実も多様だという「神の国」の「豊かさ」を知り、互いを尊重しあう共同体。なぜ、神様は人を造って初めに「土を耕し、守る」者として置かれたか少し、分った気がした。だから、主は、放射能汚染で大地を汚した人類全体の罪深さを呻く祈りに応え、ニューエデンの活動を示された

のだろう。

人が心の奥底で呻き求める本来の人間性は、ペースも関心も多様な人々が、各自のあり

方・賜物を尊重する共同体を営む中で、回復されていくものだと。壁が作られ、バラバラにな



っていく21世紀に、造られたこの人間性を回復する私たちの一歩を、神は心待ちにされていることを思いめぐらされている。

＜「被造物ケア」：21世紀の世界の若者の回復の鍵＞

バンクーバーの「アロシャ・環境センター」で運営に携わるのは、「被造物ケア」に心を動かされた30代以下の若い人たちだ。地球環境を支える自然農法を推進し、そこから始まる環境保全と教育、また地球を支える農法を支援する地域の人々による先行投資の購入と貧困家族への野菜の分かち合いを推進していた。ここでは3か月のインターン実習があり、世界中から若者が集まっていた。聖書から「被造物ケア」を学び、実践するという研修内容だ。ゲストハウスに宿泊し、ここで作られた自然農法の野菜を昼も夜も食べて、その味に感動した・・のは、私で、友夫妻は「この味は本物だね」という感想だった。食料品はみなオーガニック。ここまで自然農法だと地球にいいし、健康にもいいし、味も最高。でも高い！手間暇かかる自然農法は、消費至上社会への挑戦だ。機械化・大量生産で作った安い商品を消費する仕組みの社会。土と太陽という完全には取り換え不能な恵みを土台にする農業では、人間はすべてをコントロ

ールできない。健康と環境を考えながら、人の作業の大変さや生計が成り立つことを勘案し、種まきや収穫の喜び、共同体で仕事を分かち合う人間本来の姿を回復する。与えられた創造力で作業が楽になる機械を発明できた私たちは、効率を追求するだけでなく、神様が造ってくださった人間の姿、そして共同体としての歩みの本質を失わないための着地点を模索する時代を生きているのだ。

5年前に訪れたバングラデシュの農村の激変を思い出す。20年前は牛での農耕だったが、トラクターで耕し、養鶏場や魚の養殖場が激増した。農薬散布、鶏や魚が病気にならないように抗生物質の大量投与で、味はすっかりまずくなり、体に悪いと言う。利益を得ることが最優先になった農業、水産業が途上国で蔓延している。地球環境を大切にし、作物の手入れや収穫を心から喜び、必要を満たす収入を確保するバランスの取れた生き方は、先進国と言われた国々で後回しにされ、途上国に伝えることはできなかった。主イエスが伝えた「神の国」の実践からみれば、これこそ伝えるべきものだったのに。先進国も発展途上に過ぎない。

「アロシャ」にたどりついたアジアの金融先端地域出身の若

者の言葉が耳に響いた。「ここに来て初めて、聖書の神様が環境を大切にされ、人間にその働きを担ってほしいというメッセージを聞けた。ここで活動を始めて、私は神に造られた自分を取り戻し始めている」と。

イエス様に出会う前から一緒に歩み始めた「声なき者の友」のS姉夫妻から始まり、福島の原発事故でつながった「声なき者の友」たち。彼らに起こされた思いは、効率と経済指標だけを優先した20世紀の生き方で見失われていた「被造物ケア」につながっていた。イエス様が十字架と復活で人々と地球全体が回復される「神の国」を成就され、その完全な表れまでの歴史を紡いでおられる21世紀という時代の物語に、S姉夫妻に起こされた思いと失望する出来事を通して、私も参加させていただいているのだ。

お祈りご支援くださる「声なき者の友」の皆さんも、神様が紡ぐ大切な物語にそれぞれの場で、参加されていることを思います。皆さまの貴いお働きの上に、主の恵みが豊かでありますように心からお祈りいたします。心からの感謝を込めつつ。

2017年11月17日

柳沢 美登里

「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのために、お祈り、ご支援をよろしくお願ひいたします。活動報告は隨時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。

「柳沢支援」は右記へお願ひいたします。 郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201